〔新刊紹介〕

アンナ・コムニニ　著
（相野洋三訳）
『アレクシアス』

（悠書館、2019 年 12 月刊、8,000 円）

中　谷　功　治

「時（フロノス）は何ものにも遮られることなく不断に流れ行き、生まれ出るものすべてを運び去り、記録に値しないものも、偉大で記憶に値するものも暗い深海へ沈めてしまう、そしてまた悲劇の一節によれば、隠されたものを白日のもとにさらし、顕わであるものを覆い隠してしまう。しかし歴史記述（ロゴス テイス イストリアス）は、時（フロノス）の流れに対する最強の砦となり、抗することのできない時の流れをなんらかの方法でくい止め、時と共に生起するもののうち、とらえることのできたものはなんであれ、しっかりと包み込み、忘却の深みにおちいることを許さない。」

ビザンツ皇帝アレクシオス 1 世の長女アンナは、歴史書『アレクシアス』をこのように書き出す。執筆の目的は、彼女の偉大な父親アレクシオス帝の事績を詳しく語り、顕彰することにあった。作品の題目はホメロスの叙事詩にあやかったものであり、まさに英雄譚のような内容となっている。

記述のなかでは、時に感情の高まりを率直に述べながらも、ひるがえって自制心をうながし、偉大な父親をほめたたえるだけの頌辞とならぬよう、敵対者についても公平に扱ったと主張する。『アレクシアス』では、戦場でのアレクシオス帝の姿を余すところなく、時に現場に居合わせたかのような臨場感たっぷりに描いていく。

本書を読み終えて、帯にある「ビザンツ歴史文学の最高傑作」、「ビザンツ帝

国史研究の最重要資料」の「待望の日本語訳」を心ゆくまで堪能できる喜びをかみしめた。

関西学院大学文学部の卒業生で、文学研究科でビザンツ史を専攻し、兵庫県の世界史の教員を長く務められた相野洋三氏による労作が刊行された。本文の翻訳部分 557 頁、註釈・文献リストなどが 280 頁、さらにビザンツ史研究の第一人者で、アンナの歴史書にひとかたならぬ思い入れのある井上浩一氏による序文付き。900 頁に迫る構成は堂々たるもので、しかも固有名詞と事項部分に分かれる索引は、ギリシア文字の表記とともに詳しい説明が付記されている。

翻訳はギリシア語原典を何度も何度も読み返し、最良の訳文について推敲がなされたという。註釈については、英独仏に加えてロシア語版をも詳細にチェックし、可能なかぎり不明な点の排除がめざされている。

ビザンツ史研究者としては、中国の班昭を除いて世界でも希有な女性史家アンナの作品ゆえ日本語での翻訳が出て当然という思いもあるが、それ以上にこれだけ立派な内容で『アレクシアス』が訳出されたことに瞠目・感激している。可能なかぎり多くの読書人に知らせたい思いでいっぱいである。

もはや業界の合い言葉のようになっているが、厳しい出版事情のなか本書の刊行を引き受けられた悠書館の長岡正博さんの英断に最大限の賛辞をおくりたい。大著ゆえ値段も相応であるが、内容の充実ぶりからはリーズナブルである、というのが率直な気持ちである。まずは本書を書店にて手にとり、やや興奮気味に紹介文を書いた理由を実感していただきたい。